

歌壇

マルコ・原田・竹内さんに

小島 なお選

【期間賞】

見出し語にないきみの声さがしてはページの海で溺れつづける

(安曇野市) あづみのマルコ

【評】あまりにも多くの情報があふれる現代において、内容を要約する見出しやサムネイルは最短距離で対象を把握するための重要な扉である。けれど、深くきみを知るためには見出し語では説明されて



あづみのマルコさん

いない本編をめくる必要がある。うわべではなく、もつと奥にある心底の声を聞きたい。きみが魅力的であるほど、そのページ数は増え、内容の厚みに時間をかけて溺れることになるのだろう。

【次席】

自分だけ違いが分かる寝る用のTシャツ脱いでTシャツを着る

(松本市) 点 と 弧

【評】人から見ればほとんど同じに見えるTシャツであっても、作者にとつては寝る用と日中用のTシャツではまったく違うのだ。肌あたりの柔らかさ、吸湿性の高さ、生地

の張りなど、自分にとつて何が大切であるのかを知ることが案外難しい。「自分だけ」

とすこし客観的に笑ってみせながら。生活とは自分が心地よく過ごすための工夫の積み重ねであることをあらためて教えられる。

米川千嘉子 選

【期間賞】

閉じることできみ耳はよしおはなし会入れぬ子ひとりときおり笑う

(長野市) 原田りえ子

【評】目は閉じてしまえば見えないし、口も閉じて黙って



原田りえ子さん

しまえば、外の世界とは遮断される。それに比べると耳は、少なくともそのように自身だけの力で閉じることができない。まず、この把握が思いがけないし、その上で会の輪に入れない子の心理が的確に伝わってくるのも巧みだ。笑うことで本当はその輪に入りたい気持ちを感じた子が、この後自分から入っていきける勇気ももたらしい。

【次席】

腰曲がり勝負服着る気がうすれ二着をかわるがわる着てゆく

(千曲市) 関 津和子

【評】いろいろな勝負服があるが、下句から考えると定期的に、あるいは毎日出かけるところ、職場とか、ちよつとおしゃれしてゆく集まりのようなどころか。勝負服を着なくなったのは体形に合わなく

なつたからと言うが、それによつて、ここ一番とか今日はぜひ頑張らねば自立たねば、といった気負いから解放される心地よさを作者は知つたのだらう。そんな感じが下句の調々たる調子に滲む。

小池 光 選

【期間賞】

秋晴れの朝の空気の切れ味は証目に沿つて薪割ることし

(東御市) 竹内 幸彦

【評】この歌は比喩がとてもよい。秋晴れの朝のさわやかな空気の感覚がやさやかに伝わってくる。証目に沿つて力



竹内幸彦さん

いっぱい薪を割れば、一瞬に真つ二つになって、さぞ爽快なことだろうと思う。わたしはこういう経験がないが、歌に接するとあたかもじぶんが割っているような気持ちになる。そして、とても清々しい気持ちになる。短歌は比喩ひとつで、できるものである。

【次席】

改札で転びし女性に手を伸ばし声をかけし異国の若者

(安曇野市) 細川 恒

【評】日本の人口がだんだん減つてきて外国の人に頼らねばならない場面が増えてきている。そこにはいろいろな文化の違いによる軋轢も発生する。しかし、人のやさしいところは、つまるところ変わらないと思いたい。手を差し伸べてくれたのは外国人の青年だった。うれしかったと思う。わたしも異国の青年に電車の席を譲られたことがある。

信毎歌壇・俳壇

第122回 期間賞

信毎歌壇・俳壇の第122回期間賞(2

025年7(12月)が決まりました。入賞

者には賞状と記念品を贈ります。